

発信型の和英辞典を目指して

杉浦正好
(外国語教育講座)

Developing a Communicative Japanese-English Dictionary

Masayoshi SUGIURA
(Department of Foreign Languages)

要約：英和辞典と比較すると、和英辞典の注目度はこれまで低く、進化もそれだけ遅れがちであった。その歴史的要因の一つとして、日本の英語教育が受信型であったことが挙げられる。そのような状況下では、和英辞典に対する必要性が低く、編集及び内容面の進歩も滞り、使用者の信頼感も薄れることとなった。この数年の間に新機軸を出している和英辞典が相次いで登場し、その内容の進歩には著しいものがある。分析の結果、現代の英語教育で求められているのは、発信型の学習和英辞典であり、その中心になっているのは言語・文化情報と用例であることが判明した。その中でも、特に重視されるのは良質の用例作りである。最後に、英語ライティングの学習者にとって使い易い和英辞典の方向性を探る。

Keywords: 学習和英辞典, 受信型, 発信型, 用例

1. はじめに

外国語学習及び指導において辞書は欠くことができない存在である。日本の英語教育界でも、これまで数え切れないほどの辞書が出版されてきた。その内の大多数は英和辞典であり、売れ行きも他の種類を圧倒してきた。学会や研究誌でも辞書のあり方について論議されてきたが、その内容と使用法の研究となると、主たる対象は英和辞典であり、その関連として英英辞典も触れられてきた。

一方、英和辞典と対をなす和英辞典に対する関心は低調で、売れ行きも必ずしも順調とはいえない。その文献や分析研究も英和辞典とは比較にならないほど少なく、英和辞典の付録程度にしか扱われてこなかった。英英辞典の内容研究については、編集地である英語圏で研究が盛んであったのは言うまでもない。

今回、学習研究社『スーパー・アンカー和英辞典』(2000)の執筆にたまたま加わったことから、あまり注目されてこなかった和英辞典について興味を持つこととなった。執筆の過程で知り得た情報を利用し、和英辞典のあり方を考察してみる。同時に、和英辞典の歴史に触れながら、どのように進化しつつあるかを分析してみる。なお、本稿では、高校生や大学生といった中級学習者を対象とした和英辞典に焦点を当ててみたい。

II. 和英辞典の略史

和英辞典の変遷を振り返り、おおよその発展の流れを掴んでみよう。詳細な歴史については、本稿の領域を越えるので、小島(1992)を参照されたい。

本格的な和英辞典は、1867年に出版されたヘボン編「和英語林集成」が最初で、主として英語母語話者向けに作られた。その後、1909年に井上十吉編「和訳和英辞典」が三省堂から出版された。この辞書は、日本人学習者を対象としており、現在までの和英辞典の原型を成していると言われる。「和訳和英辞典」に続く和英辞典はしばらく登場しなかったが、ようやく下記の3点の和英辞典が相次いで出版された。いずれも、個人の職人芸的な努力の結晶ともいえる代物であり、出版までに長年の歳月を要している。この3点の辞書は、戦前の代表的な和英辞典として挙げられよう。

武信由太郎編(1918)『武信和英大辞典』研究社。
竹原常太編(1924)『スタンダード和英大辞典』宝文館。
斎藤秀三郎編(1928)『斎藤和英大辞典』日英社。

『武信和英大辞典』は1931年に発行された『研究社新和英大辞典』の基礎になるものである。『スタンダード和英大辞典』は文例の出典を明記し、英語表現の誤りや英語として不自然な言い方を排除することを目指している。この辞典は、大修館『新スタンダード和英辞典』(1964)へと引き継がれた。英米の文献を基礎とした『スタンダード和英大辞典』に対して、日本人による日本語的な訳語を積極的に採用して編纂されたのが、『斎藤和英大辞典』である。これは日本的な発想を残し、日本文化の香りが随所に登場する辞書といえる。復刻版も出版され、さらに仮名の見出しにして、1999年に再出版されている。

その後登場したのが『武信和英大辞典』を全面改訂した増田綱編『研究社和英大辞典』（1931）である。この和英辞典は第3版（1954）、第4版（1974）と改訂され、代表的な和英大辞典として今日に至っている。この和英辞典の規模に匹敵する新しい和英辞典はまだ現われていない。和英辞典の多くは、この『研究社和英大辞典』を参考にして編纂されてきたと言われている。

これらの辞書の編纂方法について、辞書編纂で名高い小西（2000：21）は次のようにまとめている。

「それまでの日本の和英辞典というと、多くの場合は英語の文を訳して作っていたといわれます。まず模範解答の英文をもってきて、訳して日本語の文章にする。その日本語の中にある語を見出し語に立てて並べていきます。」

和英辞典が「学習和英辞典」として本格的に進化したのは、1984年に小島義郎、竹林滋編「ライトハウス和英辞典」が研究社から出版されてからである。小島（1982：540）によれば、「よい和英辞典の条件とは英和辞典を引き直さなくても訳語の意味・用法が分かるような和英辞典ということになる。」この約20年近くの和英辞典の進化は、ほぼこの理念の実現に向けての努力とあってよい。項目の選定や語義の分類の工夫により、国語辞典として利用することもできる程の成果を見せている。

III 和英辞典の需要

これまでの日本の英語教育では、欧米の事物の導入を図ることに主眼が置かれてきた。いわば、受信型の英語教育が長い間主流であった。英語はそのための媒介としての役割を果たしてきた。英語を日本語に翻訳するための道具として、英和辞典が重宝されてきたのは、このことが大きな原因であったといえよう。

一方の和英辞典はどうであろうか。受信型の英語教育の状況下で、和英辞典は英和辞典に質・量とも大きく水をあけられてきた。発信型の英語教育が求められている現在はどうであろうか。第一に、量の問題である需要の現況を探ってみよう。次に、低需要の原因となっている2つの要素を探ってみる。

1, 和英辞典の需要

戦後の英語熱の高まりの中で、英語学習人口も増大し、英和辞典の需要は急速に拡大した。出版競争の激化とともに、質的な変化も目を見張るものがある。訳語のみを羅列した英和辞典から、学習のための情報を加えた「学習英和辞典」が登場し、その方向で急速な進歩を遂げてきたのである。

英和辞典と比較すると、和英辞典の需要は低く、採算が取れないと言われている。英和辞典のみを出版し

ている会社もあれば、英和辞典とのバランスや面子を保つために和英辞典を出版している会社もあると聞いている。

一般的に言えば、学校でも和英辞典に対する関心は低い。入学時に英和辞典を推薦し、購入を勧めている高校は多いが、和英辞典についてはせいぜい推薦止りである。高校へ送られてくる見本や献本も、英和辞典よりはるかに少ない。生徒も和英辞典にあまり馴染んでいないようである。山岸（1998）の調査によれば、高校時代に和英辞典を多用したと回答した大学生は、223人中2名だそうである。愛知教育大学における調査でも、和英辞典を持っていない一般学生が約半数近くいるのが現実である。

2, 和英辞典の必要性

和英辞典はなぜ需要が低いのか検証してみよう。英和辞典の需要が高い高校においても、和英辞典が授業で使われる機会は決して多くはない。大学生の聞き取り調査によれば、高校でのライティングの授業の多くは入試関連の文法問題を解くために使われていると聞いている。また、ライティングの授業があっても、その主流は、和文英訳であり、教科書には注として詳細な訳語が載っている。大学においては、ライティングの授業の担当を希望する教員は少ないのが現実である。現況では、学習者が和英辞典を使用する必要性も必然性も少ないのである。

3, 和英辞典に対する不信心

需要が低いもう一つの理由に和英辞典に対する根強い不信心がある。和英辞典の短所を指摘し、使用を強く戒める教員や、その使用を禁止する英語教員もいると聞いている。確かにその理由に根拠が全く無い訳ではない。発信型の英語教育の要請に必ずしも応えていないという指摘もある。この点について、中尾（1999：76）はこれまでの和英辞典の構造的な欠陥を次のように述べている。

「従来の和英は厳密な意味では発信型とはいえなかった。それは単語レベルで日本語に相当する英語を探すことがほとんどで、そうでなければ、洒落た文句など名人級の英語表現を探すためというのが和英辞典にたいする利用者のイメージであり、また事実そういった和英が優れた和英辞典であるとされていた。」

和英辞典に対する不信心は国語辞典に根差しているという意見もある。和英辞典の見出しの選定や語義の分類に国語辞典が欠かせないが、語義説明が単なる類義語であったり、用例が十分に吟味されていないことが多い。そのため、和英辞典も未整備のまま編集されてしまうと指摘されている。結局、信頼できる和英辞典を編集するには、既存の国語辞典があまり役に立た

ず、「和英辞典の編集者はまずもとなる国語辞典作りから始める羽目になる。」(正保1988:10)

IV. 和英辞典の問題点

実際の和英辞典の中の例を見ながら、指摘された問題点を具体的に検証してみよう。なお、引用されているのは代表的な例であり、決してその辞書の問題があるわけではない。

1, 説明が不十分

英語辞典編纂に多く関わった経験のある小島(1981:82)は従来の和英辞典について次のように述べている。

「和英辞典は英和辞典にくらべると編集技術が遅れている欠点が多い。たとえば、訳語欄には多数の英訳語が列記されているだけで、多くの場合訳語相互間のニュアンスの区別、文体的な差というものが記述されていない。文型・文法的な説明もされていない。そこで使用者はどれを使ってよいか迷ってしまうのである。」

次は、多数の英訳語が列記されている例であり、まるで類語辞典を彷彿させるものである。

『うまい』

I [美味な] delicious; dainty; palatable; sweet; savory; tasty; nice; good (-tasting); toothsome; luscious

(研究社新和英大辞典第4版)

類語の羅列のみで、ニュアンスの差異の説明がなされていない。その結果、実際の使用の場面で、学習者がどの語を選んでよいか迷ってしまう。ニュアンスに対する意識の低い学習者は、最初の語を訳語として採用しがちである。意識の高い学習者は、これらのニュアンスの違いを確かめるために、英和辞典や英英辞典を引き直す手間が生じる。

2, 用例が不自然

用例は学習者にとって必要性の高いものでなければならぬ。次の項目を中級英語学習者の立場から見よう。

『日記』

a diary; a journal; a daybook

旅～; 心の～; ～文学; ～帳; ～に書き込む;

～を付ける

本日～につけることなし。 There passed nothing worth writing. / Nothing worth recording happened today.

(研究社新和英大辞典第4版)

多様な用例があるのはよいが、やや古めかしい「旅日記」などのような日本語表現が例として挙げられている。「本日～につけることなし」もさることながら、それに対応する訳文は中級学習者にとっては格調が少し高すぎるのではないだろうか。

3, 見出しが少ない

学習者が和英辞典を使用する際に、該当する見出しがなくて落胆することが多い。やや大ざっぱな比較になるが、それぞれ姉妹版ともいべき英和辞典と和英辞典を比較してみると興味深い。『研究社英和大辞典』第5版の見出しは約23万5,000語であるが、『研究社新和英大辞典』第4版は約8万語である。一方、『プロシード英和辞典』は約4万5,000語で、『プロシード和英辞典』は約2万語である。いずれも和英辞典の見出しは半分もない。該当する見出しがなくても、類義語や関連する語(句)で検索すれば間に合うこともあるが、学習者にとっては手間がかかることになる。確かに、指摘されている通りといつてもよいが、このような解決の方法は学習和英辞典の方向性に逆行することにもなる。

V. 和英辞典の進化

指摘された欠点があるまま放置されてきた訳ではない。新しく編集されたり、改訂された和英辞典は次々と新基軸を出している。これまでに改善された和英辞典の主な特徴を次のようにまとめることができよう。

1, ひらがな表記の見出し

和英辞典の見出しといえば、ローマ字表記でアルファベット順の配列が当然のこととされていた。それが、大修館の『新スタンダード和英辞典』(1964)を始めとして、次々と仮名表記の五十音順が採用されていった。1928年に刊行された『斎藤和英大辞典』でさえも五十音順配列の新訂版(日外アソシエーツ『New斎藤和英大辞典』1999)で登場するようになった。当初、英語の辞書として違和感があったものの、今日では仮名の見出しは完全に定着した感がある。

2, 丁寧な説明

英語学習が大衆化されるにつれて、辞書の内容も分かり易い記述がなされるようになってきた。英和辞典がその先駆けとなり、「学習英和辞典」の呼称が定着してきた。見出し語の訳だけを載せていた英和辞典に語法や文化的な説明が加えられ、その流れは和英辞典にも影響を与えることになった。新しい和英辞典は、訳語のニュアンスの違いや文化的な差異を積極的に加えるようになり、英和辞典や英英辞典を引き直す必要が少なくなった。次は、ニュアンスと文化の違いを表すそれぞれの記述例である。

はう 這う crawl, creep (同義の場合もあるが、後者には「音を立てずにゆっくりと」とか

「蛇のような気味の悪いものが」といったニュアンスがある)

(スーパー・アンカー和英辞典)

サイダー pop; ((米)) soda pop (▲cider は米国ではりんご汁, 英国ではりんご酒)

(プログレッシブ和英中辞典第2版)

説明が詳しくなるにつれて、スペースを多くとるようになる。ページ数を限定すれば必然的に見出しの項目が限られることになる。

3, 例文化

従来は、見出し語、あるいはその関連の語(句)に訳のみを羅列することが多かった。文脈や状況が不確かなため、そのまま本文に入れると、木に竹を接いだような文章が生まれることになる。用例をセンテンスとして載せるようになると、それだけ状況が明確になる。センテンス化によって、学習者は状況を推量でき、本文に見合った工夫をすることが容易になってきた。用例を多く載せることにより、見出し語がさらに限定されることになる。

次の例の「うまい」の見出しの「おいしい」という意味区分では、語法欄でdelicious, good, niceのニュアンスの違いを説明し、下記のような例を加えている。

これはうまい This is good {delicious tasty}./

This tastes good {nice}. ★前者のほうが口語的.//
彼はうまそうにステーキを食べた He ate the steak with relish. 腹がへっていればなんでもうまい Hunger is the best sauce. ((ことわざ: 空腹は最上のソース))

(ライトハウス和英辞典第3版)

『研究社新和英大辞典』の前述の例と比較すると、内容の差が歴然としている。使用頻度の多い語句を限定し、用例化によって状況が分かるように工夫されている。

4, 表現の現代化

これまでの和英辞典の用例は一時代前の著書物からの抜粋が多く、格調が高過ぎる傾向があった。そのため、学習者は、文豪が用いた表現を脈絡なしに使ったり、口語体と文語体を混同した英文を使うことがあった。

また、見出しも現代的な表現が載っていないことが多かったが、次第に使用頻度の多い現代語を採用するようになった。例えば、「ルーズソックス loose socks」も載せる辞書も出現した。流行語は消えるのも早いかもしれないが、少なくとも当分は生きの良い用例として生き残るであろう。

5, 口語体を重視

現代語とともに、口語体を重視するようになった。『スタンダード和英大辞典』が用例の多くを文語に頼っているのとは対照的である。『スーパー・アンカー和英辞典』では、「いや」の項目では、次のような若者言葉に入りそうな例などを載せている。

ああいうもって回った言い方っていやーね。

That sort of roundabout way of talking turns me off. (turn offは「うんざりさせる」)

一昔前では、このような用例は響きものであったろう。このような口語表現は用例がないとむしろ意味をなさない。例えば、「とろい」という口語表現をそのまま英語にするのは不可能に近い。それを、「あいつの仕事はとろくて見ているといらいらする.His stupid way of working irritates me.」(スーパー・アンカー和英辞典)のように例示した方が効果的であると言える。口語表現の採用によって、用例をさらに充実させる必要が生まれた。

また、会話表現を対話形式で載せる辞書も多くなった。中には、次の例のように、対話表現を例文にして加えている辞書も現れている。例えば、『ニューセンチュリー和英辞典』第2版(三省堂1996)は、「気温」の項目の末尾に次のような「会話」コーナーを設けている。

「今気温は何度ですか」「25度です」"What's the temperature now?" "It's 25°C."

(twenty-five degrees centigradeと読む)

6, 母語話者の編集参加

戦前の辞書にも英語の母語話者の名前が記してあるが、ほとんど編集作業に参加していないようである。中には、母語話者の名前は飾りにすぎない場合もあると聞いている。文豪によって書かれた古典文学作品から抜粋された用例については、母語話者であっても批判するのが難しい。しかし、近年重用視されつつある口語体や現代用語などを検討する場合、母語話者はインフォーマントとして欠くことができない。もちろん、全ての母語話者の意見が正しい訳ではない。望まれるのは、日本語にも堪能で、英語とのニュアンスの相違が理解できる語感の優れた母語話者の執筆や編集への参画である。

7, 日本文化の紹介

発信型を目指す辞書は、日本の事物を世界に紹介することもその任務に含まれている。外国人からの質問を受けた時に、適切に答えるための参考表現を提供することも必要である。扱いは和英辞典によって様々であり、例えば、『ライトハウス和英辞典』(研究社1996)では、「日本固有の風物と英語」として囲み記事とし

てまとめている。『旺文社和英中辞典』(1998)などは、日本独特の事物の英語紹介文例を関連の項目毎に枠組みにして情報提供の便宜を図っている。次は三省堂『センチュリー和英辞典』の日本文化紹介の1例である。

こんにゃく 蒟蒻

(食物) a piece of konjak [konnyaku] (jelly);
(説明的に) a hard jelly made from the starch of
devil's tongue; (植物) devil's tongue.

8. ハイブリッド化

『ジーニアス和英辞典』(大修館1998)は「ハイブリッド」形式を持つ画期的な試みをしている。要するに、英和辞典の和訳の項目を見出しとして利用し、その中に含まれている用例と説明を随所に利用して作成した辞書である。そのため、ニュアンスなどの説明において一日の長がある英和辞典の良さを生かすことができる。和英辞典の後に、もう一度英和辞典を引き直すという手間を省くことができるメリットを持つ。しかし、まだ解決すべき問題点が残されている。その一例を見てみよう。

しようぼう 女房 wife {C} (呼びかけには用いない) "I've quarreled with my wife." "I thought [guessed] as much." 「女房とけんかしましてね」 「そんなことだろうと思ったよ」 / He vented his anger on his wife by shouting at her. 彼はどなりつけて女房に怒りをぶつけた

「呼びかけには用いない」という説明が加えられているが、「女房」ではなく、「wife」に関する英和辞典向けの情報である。用例もユニークなものといえるが、和英辞典に必要な情報とは言えない。"I thought [guessed] as much." という用例は、状況設定を明確にするためには良いが、スペースを考えると本当に必要かどうかは議論の分かれるところである。英和辞典を引かなくてもよい辞典は、逆に、英和辞典の巻末付録の簡単な和英辞典ですら十分という指摘もある。英和辞典をひっくり返すだけでは和英辞典はできないので、この新機軸はさらなる工夫が求められる。

9. 電子辞書の出現

急速に需要が増えているのが電子辞書である。英和辞典、国語辞典が中心で、それに和英辞典や英英辞典までが加えられているものまで出現している。教室に持ち込むのを嫌う英語教員もいるが、無視できない状況になっている。むしろ、携帯性や検索などの便利さから考えれば、積極的に利用することを視野に入れて指導すべき時期に来ている。

VI. 用例作りの実際と問題点

見出しの訳を羅列する時代から、文化・言語情報の豊富さを競う時代へと変わった。さらに現在は、和英辞典は用例の善し悪しで勝負する時代へと転換してきた。いわば、用例作りが辞書の生命線となりつつある。ここでは、微妙な編集方針については触れずに、用例作成上で留意した点を挙げ、今後の問題点としたい。

以下の用例のほとんどは『スーパー・アンカー和英辞典』からのものである。当然のことながら、訳語だけで済む項目以外は、他書からの用例の引き写しは厳禁である。用例は語感とひらめきが必要で、できるだけコンテキストが理解できるように留意した。

1. コロケーション

見出しにふさわしい用例が必要である。特に重要なのは、語と語の連結を表すコロケーションである。日本語も英語もコロケーションとして違和感があるのではない。山岸(1999)によれば、原稿の段階で、「彼女は僕の母です」という日本語があったそうである。英語にすれば、「She is my mother.」で違和感はないが、上記の日本語は奇異であり、コロケーションとして不適切である。英文を作ってから日本語を考えたための副作用といえよう。この英文にどのような日本語を付けるかは、状況により変化するため困難極まる問題となる。

コロケーションに関係する具体例を挙げてみる。『投与』で用例を作るとすれば、日本語のコロケーションは薬の投与に限られてくる。そこで、「がん患者に抗生物質を投与する」となり、英語のコロケーションとして、「administer [give] antibiotics to a cancer patient」という用例が生まれる。コロケーションは語感の問題であり、信頼できる母語話者の助けが一層必要である。

2. 日本文化紹介

新しい和英辞典は、日本の事物の紹介に力点を置いている。問題は、英語のみで表現するのは不可能に近いことであり、どの辞典も説明が似てしまうことである。従って、新しい辞典には、独自の工夫や機軸を打ち出すことを求められている。例えば、『煮込み』だけでも十分に日本文化を紹介する項目になっているが、手前味噌になるが、さらに「(みそ)煮込みうどん udon noodles in a hot (miso) soup with meat and vegetables」の用例を加え、ローカル色を出した。

3. 日本語の専門家による用例

英語の用例を先に考えると、日本語らしい用例が漏れる恐れがある。この問題を解決するために、先に日本語の用例を作成し、それを英訳することになる。執筆者本人が作成する日本語はどうしても安易になりがちであるので、日本語の専門家が担当することになる。時には、次の2例のように、専門的な用語とそれに関する資料の調査が必要になってくる。

『促す』テストステロンは筋肉の発育を促す。
Testosterone promotes muscular development.

『通す』「マタイ受難曲」を全曲通して聴いた。
I listened to "St. Matthew Passion" from beginning to end.

「テストステロン」も「マタイ受難曲」も専門家でないと思いつかないため、執筆者は苦勞することになる。

4, 生きのよい用例

用例は、「生きのよさ」も重要な要素の一つである。そのためにできるだけ時代に即した用例を作るよう求められている。その一つとして、具体性を持たせるために、代名詞よりも固有名詞を使うように配慮している。しかし、時にはそれが仇になることもある。次の例を見てみよう。

『留め』 留めを刺す

Eto hit a grand slam in the bottom of the eighth inning to put the game out of the Giants' (reach).

西暦2000年から、江藤選手はジャイアンツのユニフォームを着ることになり、用例が状況に合致しなくなってしまった。代名詞を使えば問題はないが、用例としての面白さは失われることになる。改訂のサイクルが早くなっているのだから、多少の犠牲は止むを得ないと思われる。

5, 英語らしい英語, 日本語らしい英語

母語話者が最近の辞書の編集に積極的に関わるようになり、一層英語らしい用例が登場するようになりつつある。次は、筆者の英訳した用例が母語話者のインフォーマントによってどのように変えられたかを示す例である。最初の英文が筆者の訳で、次の英文が添削されたものである。下線部が主な変更箇所である。元の文も文法的には全く問題のないものである。いずれの例も母語話者がいなければ浮かばない用例であろう。

『初々しい』 真新しい制服姿の新入生はほんとうに初々しい

The new students look really fresh in their new uniforms.

→The incoming students look charmingly fresh in their new uniforms.

筆者は、「新入生」を「the new students」, 「ほんとうに初々しい」を「really fresh」と訳出した。状況を説明するだけの英文が、この内の2語を、それぞれ「incoming」と「charmingly」と変更しただけで、生き生

きとしたニュアンスを持つことになった。

『とれる』このびんのふたは固くてどうしてもとれない

I can't open this bottle because the cap is too tight.

→I can't open this bottle because the cap is on too tight.

副詞「on」がなくても「ふたが固い」という意味は十分に可能であるが、「on」があることにより、「ふたがくっついて取れない」というニュアンスが出てくる。

原文の日本的な表現やニュアンスを訳文にどの程度残すかは和英辞典編集の永遠のテーマであろう。次は日英どちらの発想を優先するかが問題になっている例である

視力は両目とも1.0だ

My eyesight in both my eyes is 1.0.

My eyesight is twenty-twenty.

前者は日本式の検査結果を踏まえた表現で、これだけでは英語として十分通じない可能性がある。日本語らしい表現が前者とすれば、英語らしい表現が後者であろう。中本(2000)は両者を並記し、英米における視力測定の違いを解説するのが望ましいと述べている。『スーパー・アンカー和英辞典』は「I have twenty-twenty vision.」という表現も載せている。

VII. ライティング指導と和英辞典

西暦2003年4月より施行される高等学校学習指導要領外国語(英語)のライティングの目標は以下のように述べられている。

「情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」

現在の状況はどうであろうか。発信のための英語教育が叫ばれているが、中学校、高校、さらに大学の英語の授業では、ライティングの指導が必ずしも十分に行われていない。このような状況が続く限り、和英辞典の存在価値は低い。

しかしながら、ライティング指導が必要となる新たな動きが生まれつつある。西暦2000年10月より、外国語としての英語力を判定するTOEFLテストがコンピュータによって実施されるようになった。それに伴い、トピックを与えられて英文を書くことが必須になっ

た。この動きによって、英語の授業でもライティング、その中でも、トピックを与えられて行うエッセイ・ライティングの指導の重要度は増すことと思われる。

このような能力を磨くためには、従来の和文英訳を超えたライティングが必要になってくる。その練習に必要な語彙はどのようにして習得させるかが問題である。ある程度の語句については、注や付録で済ませることが可能であるが、生徒の多様な考えを引き出すためには、それだけでは不十分である。多様な表現力を探るために必要となるのが発信型の和英辞典である。

教室でのライティング指導において、生徒の意見を十分に反映させることが必要である。前もって使う語句を与えておくことができないので、その場で和英辞典を与えることになるだろう。各自に和英辞典を持たせるのが望ましいが、和英辞典をグループごとに配布して使用させることも現実的な対応であろう。あるいは、数セットを教室に配備しておけば便利である。「生徒のより積極的な活動を引き出すにはこれまでに増して和英辞典は必要である。」(南出 1993: 22)。

VIII. 発信型の和英辞典へ

これまでの受信型英語教育において、和英辞典はそれほど必要とされていなかった。ところが、日本からの情報発信の重要性が叫ばれている今日、そのための道具として、発信型の和英辞典の必要性がますます高まるものと予想される。和英辞典の一層の改善に向けて今後の方向性を探ってみる。

(1) 「大和英辞典」

英和大辞典は『研究社新英和大辞典』を始めとして、『小学館ランダムハウス英和大辞典』などがある。しかし、現代的な英和大辞典となると、『研究社新英和大辞典』しかない。しかも、1974年以来、2000年までの段階で改訂版が出されていない。本格的な改訂、及び新しい英和大辞典の出現が切に待たれる。

(2) 教育用語和英辞典

国際化の進展に伴い、医学や科学技術用の和英辞典が数点出版されている。一方、教育用語専門の和英辞典は残念ながら少ない。教育界の国際化が遅れていることが大きな理由と思われるが、本格的な教育用語和英辞典の編纂が待たれる。

(3) コンピュータの活用

常に改訂を迫られる現代の辞典編纂は同時に多くの時間と労力が求められる。コーパスに基づいた英英辞典の出版が英国では常識になっている。その波は英和辞典、そして和英辞典にも押し寄せてくることと予想される。信頼できる和英辞典を世に出すためには、大学、研究所、出版社が協力して、独自のコーパスを構築する必要がある。インターネットを利用して共同データベースを構築し、利用することも選択肢の一つであろう。

コンピュータの利用により、私家版和英辞典を作ることが可能になっている。既存のコンピュータ・ソフトには、項目を追加できるような機能が含まれている辞典もある。工夫をすることにより、自分だけの和英辞典を作ることも可能であろう。

コンピュータの活用が和英辞典にとって良いことばかりではない。電子辞書の普及は進歩といってもよいが、英和辞典とドッキングされることによって、和英辞典単独では売れなくなる恐れがある。また、コンピュータ翻訳ソフトの進歩によって和英辞典の存在そのものが脅かされる可能性がある。和英辞典の需要は今後増大すると予想されるが、和英辞典そのものの売れ行きは必ずしも楽観できない。

(4) 英英辞典の用例の活用

COBUILD English Language Dictionaryは、実際に日常生活で使われた言語材料をそのまま用例として利用している。一方、Oxford Advanced Learner's Dictionaryは、コーパスを活用しているが、加工した用例を載せている。それぞれ長所があり、いずれも貴重な資料である。著作権の問題もあるが、用例を和英辞典にも利用できる道を探りたいものである。

IX. おわりに

和英辞典の編纂は、非常に多くの労力を要する作業であり、これでベストとは言いがたい面がある。刊行の次の日から改訂を迫られているといってもよい。また、和英辞典について一般にあまり理解されていないことも判明した。これまで、あまり日の当たることがなかった和英辞典の使用を見直すきっかけとなり、今後さらに優れた内容の和英辞典が生まれることを期待したい。

この論文は平成12年6月2日に愛知県立国府高校で実施された東三河高校英語研究会での講演を基に加筆したものである。

参考文献：

- 岩崎春雄・忍足欣四郎・小島義郎(編)(1988)『現代人のための英語の常識百科』研究社。
 小島義郎(1981)『英文科学生必携ハンドブック』研究社。
 小島義郎(1992)「和英辞典」竹村滋・千野栄一・東信行(編)『世界の辞書』研究社。
 小西友七(2000)『新時代の和英辞典(下)』三省堂。
 正保富三(1988)「和英辞典の現在」『現代英語教育』4月号, 10-11, 研究社。
 中尾啓介(1999)「和英辞典」『大学生の英語学習ハンドブック』研究社。
 中本恭平(2000)「和英辞典の存在意義」大学英語教育学会英語辞書研究会シンポジウム提案。

- 南出康世（1993）「ライティングと辞書・語彙指導」
『英語教育』6月号, 20-22, 大修館.
- 山岸勝榮（1998）『英語教育と辞書の思想と実践』
こびあん書房.
- 山岸勝榮（1999）「和英辞典の問題点」日本時事英語
学会関東支部研究例会口頭発表.